真宗大谷派大阪教区教化委員会機関誌［沙羅林］

しゃらりん

08 2005/4

「シロの聞法見聞録⑥ 出演者インタヴュー」

教区アラカルト 「大和青年会」

目次

contents

シロの聞法見聞録④
出演者インタヴュー …… 3

教区アラカルト
「大和大谷青年会」…… 6

Books しゃらりん堂 …… 8

アトリエしゃらりん …… 9

月参りはおもしろい …… 9

ちょっといこか ……10

しゃらりんちゃん ……10

土香炉【どごうろ】

香炉の起源を尋ねるに、仏教にその端を発している。『浄飯王般涅槃経』には、釈尊の父君浄飯大王の葬送に際し、釈尊自ら香炉を執り給う事を述べて「如来躬自らに手に香炉を執りて喪前に在りて行く」とあり、『法華経』に「無宝の香炉に無価の香を薫く」と見えています。

「真宗事物の解説」より

シロの聞法見聞録④「椰子の実」が聞こえる

出演者インタヴュー

視聴覚伝導部による教化ビデオ教材『シロの聞法見聞録シリーズ』の最新作『シロの聞法見聞録―「椰子の実」が聞こえる―』をご紹介いたします。これまでの3作品はいずれも仏事を中心とした話を展開してまいりましたが、今回は戦後60年という節目の年にあたり、戦争というテーマでのストーリーとなりました。これまでと同様に関西芸術座の俳優さん方の熱演が、より作品を高いクオリティに仕上げています。今回出演していただいた、おじいちゃん役の溝田繁さん、そしておばあちゃん役の小笠原町子さんは共に立場は違いますがそれぞれの戦争体験を持っておられ、そのことが、より一層の臨場感をビデオの中で表現できている理由でもあるのでしょう。

そんなこともあり、お二方には無理を言って、後日南御堂にお招きし、しゃらりんのインタビューにご協力頂きました。

――まず、今回このビデオ『シロの聞法見聞録―「椰子の実が聞こえる」―』に出演されてのご感想をお聞かせ頂けますか。

溝田　最初に本を見た時に長い台詞があったんで、これは大変だと思ったのですが、なんとか出来まして、まぁ、ビデオのような経験が直接的にはありませんが、私も軍隊におりましたから、実感としてはなるほど、よく書かれている。この話なら自分の中で消化できるなぁという思いがありました。また、誰が見ても感動出来る作品だったなぁと思いますね。

――満州でのシーンがございましたが、あのシーンを演じるにあたってどんなご苦労がありましたか。

溝田　私も実は満州にいたんですよ。ただ兵舎から出るということはなかったんで、現地の人と直接ふれあうということはなかったんですが、あの頃はよく満人、満人と言っていってたんですが、今から思えば同じ人間同士でなんでこんなことになるんやと考えるとねぇ、「俺はいったい何をしてきたんや」と、また日本の軍隊は何してきたんやと思いますなぁ。

――終戦の時は以前にお聞きしたことですが無線兵をされていたらしいですね。

溝田　無線兵ではなく、航空気象兵をやってたんです。その中の暗号解読班でして、通信班が傍受した暗号を解読するんですがね。

いやぁ、あの頃はねぇ、満州事変が始まって、太平洋戦争終結まで15年間、戦争が終わる頃、私は20歳だったですけど、子どもの時から15年間戦争一色だったんですよ。鬼畜米英をやっつけることが、世界の人たちを平和に幸せにするんだと教え込まれていたんですね。

――終戦時の8月15日はどんな状況で迎えられました？

小笠原　学童疎開でしたねぇ。高知県の山奥での学童疎開で、玉音放送を聞いて先生方が「ワッー」って泣いてましたけど、生徒のほうは何のことか分からないということもありましたけど、どうも先生が泣いてるんやから、「こらぁ戦争が終わったに違いない」という思いで、生徒たちからはクスクス笑う声が興ってきてねぇ。それは、「これで家に帰れる」という喜びの思いが込み上げてきたんですね。ほんとは軍国少年、軍国少女のはずですけど。そうはならなかったのが今から思っても不思議なぐらいですね。なんでそんなに泣きもしなかったのかと思うとそれほどお腹がすいてたんですね。とにかく疎開の苦しさというものは、ほんとに食べるものがなくてね。

――子ども同士で「帰りたい」なんていうのは口には出せなかったでしょうね。

小笠原　そうですね。トイレ行った時ぐらいですかねぇ。先生がやっぱり怖かったんですよ。それ

に兵隊さんの教練の先生がウロウロしてますんでね。先生の目の前では言えなかったですけど、夜ねぇ、大きなお寺の本堂で寝ますでしょ、そしたらね。大阪で空襲があったとか、岡山で空襲があったとか、そういうニュースが入るんですよ、そしたらお父さんに会いたい、お母さんに会いたいって、一人が泣き出すでしょ。そうなったらもう集団でワァーって泣いてましたねぇ。夜になったら泣き出すんですよ。親を亡くした子がいたら、みんなもらい泣きっていうかなぁ。

――ビデオの中で空襲で逃げ惑うというシーンがありましたがどうでしたか。

小笠原　疎開してましたから実際に経験はありませんけどね。自分の友だちが空襲にあって死んだ子もいるし、ケガした子を見舞いに行ったら、あの焼夷弾って油が入ってるんですよね。だから焼けただれて、そのすさまじいさはなかったなぁ。

ただこのビデオの中では、私はそういう空襲のシーンでしたが、印象に残ったのは、溝田さんがやられた、満州の経験のシーンねぇ、中国で日本がほんとに残虐なひどい事をしたんだなぁっていうことは、非常にリアリティをもって感じられたんです。というのは私の父親が丸善という本屋の新京（注・「満州国」首都。現在の長春）支店長だったんです。新京に支店を出してその支店長になった途端にお父ちゃんがエライ威張りだしたんですよ。現地では満州人を使うんですけど、その満州人は地下室みたいなほんとネズミが走り回るような所で住んでいてね、日本人はぬくぬくと暮らしてね。その父親が満人を捕まえて、バンバンってビンタ入れて叩くわけですよね。その父親が豹変した姿が、子ども心に嫌で嫌でねぇ。だから溝田さんの台詞のなかに出てくる残虐行為を見てるとね、日本が侵略してひどい事をしたということがあったということがねぇ、事実そんな民間の企業でさえそれだけのことがあったのだから、日本人っていうのは大変な事をしてきたなぁと思いますねぇ。

だからね、このビデオ、東本願寺さんは非常に勇気のある、革新的なことだなぁと感心しました。最近はねぇ事実は無かったというように、おおい隠すようなそんな教科書まであったりする中で、事実あったというビデオまで作られるということに感心しまして、あの本を受け取った時に私絶対オーディション受かろうって思いました。

――溝田さんは終戦後ということではどうでしょうか。

溝田　北海道から戦後10月になってから帰ってきたんですけど、今までは自分は国のためにっていう目標みたいなものがありましたけど、帰ってきたら何をしたらいいのか茫然自失、ほんとに虚無状態になりましたねぇ。だけど食べていかなアカンということがあって、だから当時はみんなヤミ屋をするんですよ。自分もやってたんですが、すぐに経済警察に捕まるんですよ。こんなことしてたらあかんと思って自分の食べるもんぐらいは自分で作ろうと芋を植えたりしてやったんですけど、しかし痩せた土地でどうしようもない。それに当時は化学肥料なんてありませんから、人糞を汲んで自転車に乗せて持っていくんですよ。そしてこう撒くんですけど、痩せた土地なんだけど、虫がいっぱいおるんですよ。そうしたらねぇ。虫から鳥から、草の根から木の根から、その人糞によってたかって食べに来るんですよ。こらぁえらいこっちゃなぁ。人間が生きていく社会でも、虫やら鳥やら根っ子やらでも一緒やなぁ、強い奴が全部取っていきよるんやなぁって思ってね。これ

溝田繁さん

小笠原町子さん

は信じられない話かもしれませんけど、木が歩くんですよ。歩くというか、昨日ここにあった木が動いてるんですね。これはよう考えたら木の根っ子が肥料の方へガッーて動くものだから、木そのものが動いてるんですよ。これは自分が演劇の世界に入った動機みたいなことを話してるんですけど、「人間が生きて行く」っていうことは、どういうことやねんということをつくづく考えたんですよ。弱肉強食の世界、ともかく金持ってるやつはどないかしよる。けど金もなにも無い奴はどうして生きていったらエエんやってね。暮れなずむ畑でいろいろ考えたんですよ。人間と人間が交流する話ができるそういう場がないのか、自分ひとりで考えてるんやなくて、みんなともっと話がしたい。もっと多くの人たちと交流出来る場としての演劇の場を選んだんです。演劇は、一方的に演じてるんじゃなくて、お客さんからの反応が返ってくる。そういう響きあいの場を求めてたんですね。

――小笠原さんは、演劇の世界に入られた動機というか、どんな思いで。

小笠原　私はねぇ、なんでお芝居が好きかというと、疎開してた時に、すごくいじめられて、やっぱり都会の子っていじめられるんですよ。けどそのいじめをどう跳ねのけるかというとね。ある日自習の時間があって、その時私が「グリム童話のお話をしたげよか」というて、したんですよ。そしたらはじめは騒いどったんが、みんなシーンってなってね。「もっとして」てみんなが言ってねぇ。自習やっていうたら、いろいろな本をねぇグリム童話やアンデルセンなんかを、うち丸善で本屋ですから、本だけはいっぱいあったんですよ。そんなんを全部してね。それでいじめを克服したんですよ。これでわたしは何でもやっていける。これを生かしたらいじめられないんじゃないかなぁって思ってねぇ。

――グリム童話やアンデルセンなんかを読んでおられたことで、さっき溝田さんが言われてたみたいに響きあうものがあったんでしょうね。

小笠原　そうですよ。それまでわたしをいじめてた子が目を見開いて聞いているんですよ。田舎の子やからグリムやアンデルセンを持ってなかったんでしょうね。全く初めてのものを聞くという目の色を見てね、もうこれで私をいじめないなぁって自信がつきましたね。お話なんかをするということが、人を引きつけるということをその頃知りましたね。

――戦後60年ということで今の若い人へのメッセージというのはどうでしょうか。

溝田　地球上であっちでもこっちでも戦争してるでしょ。私たち60年前やってきた、同じことやってるんですよね。本当の人間の生き方を一人一人がどう考えているのかということを全部抜きにしているんだろうなぁ。自分さえ生きてればそれでいい、そんなことになってしまってる。

小笠原　わたし一人芝居を18年ぐらいまえからやってるんですけど、三部作ありまして、第一部は「台湾から引き上げてきたおばあちゃんの話」。第二部は「長崎の被爆者のおばあちゃんの話」。第三部は「沖縄のガマのおばあちゃんの話」。で共通しているのは、戦争で死んでしまうんやなくて、ビデオにもありましたように、今を生きていかなあかんという姿勢で、ちゃんと伝えていかなあかんというようなことですね。

――今回は、ビデオ出演だけでなくインタビューまで無理を言ってすみませんでした。

とても貴重なお話が聞けました。ありがとうございました。

（廣瀬）

教区アラカルト

大和大谷青年会

奈良での仏教青年会活動の紹介

大和大谷青年会は奈良県下（24組～27組）の寺族を中心とした青年会です。

歴史を先輩から聞くところでは、大阪教区の大谷青年会から独立するかたちで大和大谷青年会がスタートしました。そのきっかけは「生駒山ナイトハイク」だったそうです。大阪側から奈良県へ徒歩で生駒山を横断するイベントに多くの青年が参加しました。そこで、奈良県の方々が大阪（難波別院）まで来られるのは大変だろうから、奈良で青年会を立ち上げたらという事になったと聞いています。

主に会員のお寺に集まったり懇親をはかる企画を立てたりする活動を行ってきました。私自身も五條市で行われた一泊研修にさそわれたのが入会のきっかけでした。「今度は習字の練習をやるからまたきてね」の言葉に「習字がならえるのか、また行ってみよう」と思ったことを覚えています。実際にはあまり練習はしませんでしたが……。

その後、昭和55年に大和大谷別院の本堂が再建されました。落慶法要のお手伝い頼された経緯から大谷別院に集まることが多くなり、別院を会所に学習会が持たれたりしました。

この頃から大谷青年会だけではなく他の青少年団体との交流が盛んになってきました。仏青連盟のキャラバン（仏青登録団体の活動に連盟が参加させてもらい交流や情報交換をする）が奈良で開催されたり、児童連盟の春の集いやサマーキャンプのスタッフに参加したりしました。教区教化委員会の青少年特伝を受けたり、立華研修、パソコン講座というのも開催されたりしました。しかし、会員の固定化、高年齢化という課題もでてきました。大和では大谷青年会のように会員の年齢制限を設けていません。それも一因なのかもしれません。大谷別院中心の活動になったのも、近くの会

員はいいのですが、遠方の会員にとっては足を遠のかせました。

しだいに大和大谷青年会の活動は後からできた27組青年会と合同になってゆきます。

27組青年会は組で行われた教区指定の第1期推進員養成講座がきっかけで再結成されました。講座のスタッフとして若い寺族の方々が参加しました。せっかく集まったのだから進員養成講座終了後も若いスタッフが集える場所を設けてほしいと、組の方からも青年会の活性化を願われました。

会の再スタートにあたって、会員は寺族・門徒に限らず、青年会活動に関心、理解のある方すべてとしました。

現在活動は組内寺院の子供会への協力と仏教学習や会員の懇親を行っています。たとえば、組内のお寺で子供会等が開かれればお手伝いに出向ける体制で、大和大谷別院の報恩講子どもの集いには毎年、企画段階から参加させてもらっています。別院の列座さんを中心に子どもたちと一緒にゲームで遊んだり紙芝居をしたりします。会員のお寺では子ども会が開かれている所が多くみんな上手ですよ。

また、毎月1回の例会を持ち、大谷別院を会所にテキストを1冊決めて輪読会と座談会をしています。決めた本を少しずつですが読み進み、その後、参加者で意見を交換します。日頃の課題をあつく語る会員もいて、熱のこもった座談会になることもあります。

ある時は、輪番さんから別院の法要の記録をパソコンで残し、公開できないかと相談され、パソコンの講座に変わることもありました。以前のパソコン講座の後、青年会でパソコンを購入し別院で使ってもらっています。この機械を使って青年会で何かできないか検討中です。

さて、27組には若坊守会があり合同でよくバーベキューをし懇親をはかっています。日頃感じていることなど、ワイワイ、がやがやとみんなでおしゃべりです。会員の子どもたちも参加し家族ぐるみのおつき合いです。

奈良での青年会活動には盛んな時やそうでない時の波がありましたが、よこのつながりを大切にしようとする願いは今も受け継がれているように思います。

現在、27組中心の大和大谷青年会ですが、会員がひとつの地域にかたまったということでしょう。熱心な方が関心のある方々をまきこんでゆく、そうゆうことかなと思います。関心のある方々、これから青少年教化に取り組もうと考え中の方はまだまだおられると思います。1つの組の活性化が広がりを持てればいいなと願います。

（大和大谷青年会代表・松林宏明さん）

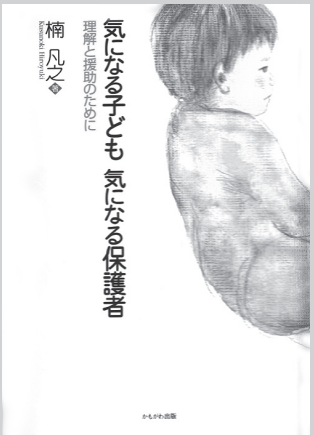
アトリエしゃらりん

画・北川浩三

http://www.icho.gr.jp/shararin/sozai/

私の一冊

第4組常栄寺
久世 見証



『気になる子ども気になる保護者
理解と援助のために』
著・楠 凡之
かもがわ出版／1785円

児童虐待やキレる子供、学級崩壊などといわれるものの背景を正しく知ることができる本です。最近、保育・教育現場でよく使われる「気になる子ども」、そして「気になる保護者」に関する様々な事例を取り上げ、実際の現場でどういう取り組みを行っていけばよいかを示唆します。

第1部では「気になる子ども」の背景として身体の発達・心の発達・養育環境などの要因が研究事例と共に挙げられます。そして、そのような子どもたちをどの様に援助して回復していくかが実際の事例と共に示されます。第2部では同様に、「気になる保護者」の背景とその保護者たちに対する対応が示されます。

序章の「本書が「気になる」子どもや保護者の問題を適切に理解し、日々の実践に少しでも「見通し」と希望を与えるものになってくれることを願ってやみません」という言葉が保育・教育現場の厳しい現状を伝えます。臨床教育学（子どもの人格発達と教育指導）、家族援助論を専門とする著者は、実際の現場に関わる中で、親も子も含めてどの様に回復していけるかを模索します。苦悩や葛藤の中にある子供や保護者、また困難な保育・教育実践の中にある方々と「応答的な関係」を築く中で、一緒に「生きるに値するもう一つの世界」を探求していきたいと記されています。

ところで、「応答的な関係」が失われているという指摘はそのまま私たちにも当てはまるのではないでしょうか？

大会テーマ

第36回　真宗大谷派
大阪教区 同朋大会

「わたし」が展らかれていくとき

主催　真宗大谷派大阪教区教化委員会

開催日時　2005年5月29日(日)
午後1時30分 開会［4時30分 閉会］

会　　場　大阪国際会議場(グランキューブ大阪)
大阪市北区中之島5丁目3-51　TEL06-4803-5555

講　　師　中村　薫氏(同朋大学教授)

参 加 費　1000円

ポスター・チラシをご入用の際は教務所にお問合わせ下さい

月参りはおもしろい・その三
「まさこさんバンザイ」

家の前で自転車を止めていると、出窓から顔を出して「奥さん？　今鍵開けます」という声がする。小柄で色白、目もパッチリ大きいまさこさんに年を聞くと「39の反対ですわ。93才。この言い方のほうが分かりやすいでしょ」と。「……？？？」。一人暮らし歴24年。(どこか『千と千尋』のユバーバによく似ている)

自坊の月参りは同朋奉讃を一緒に勤めるので耳の遠いまさこさんに合わせて大きな声でゆっくり。

そしてお勤めが終わって座りかえると、まさこさんは補聴器のリモコンらしきものを私の目の前に持ってくる。まさこさんとの距離は膝を付き合わす状態になる。毎月ここからがガマンのしどころ。立て板に水のごとくしゃべりだす。「この前、そこのスーパーで100才の人が買い物に来てはりました。私もあと7年がんばらなと思いましたわ」に始まって、テレビや新聞から見聞きした事柄を話し出す。世の中の動きをよく知っているなあと感心しているが、私は相づちをいれさせてもらえない。何のためにリモコンが私の口の前にあるんだろう？　黙って聞いているのも結構つらいが、何か言っても無視される。

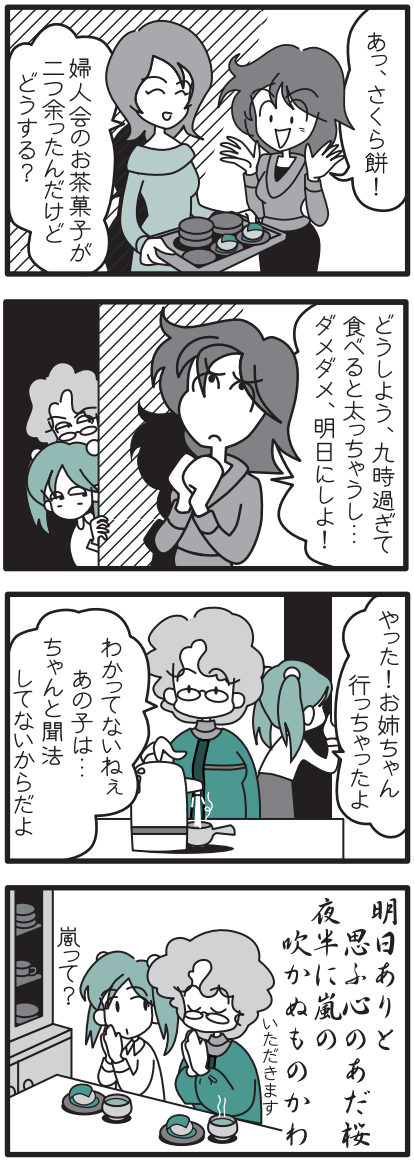
延々と続く話の中でまさこさんの気になるジェスチャーがある。男性の名前が出ると「これね、これ」と嬉しそうな顔で親指を立てる。女性は小指を出す。小泉首相は親指で、息子さんも親指。女優さんは小指で、私も小指。どの指が出ても私はなぜかドギマギする。いまだまさこさんのこの癖には慣れない。

まさこさんが、「耳は遠くなるばかりだし、歯はボロボロになってる。けど、自分のことは出来るだけ自分でやる。しんどくなったらベッドで休み休み、自宅入院ですわ。夕方、お仏壇の前に座って今日一日過ごせたことに感謝し、お寺で聞いた○○○先生の話を思い出している。人間というのは人と人の間を生きるものって言うてはりました。今になって本当にそうやと思います」と言う。私はびっくり。お寺参りはもう15年位前から顔を見ていないのに、講師の先生の名前をフルネームで覚えているし、言葉ももちつづけている。続けて「今が幸せです」と二度まさこさんが言った。その顔は明るい。この明るさをどう受けとればいいのかなあ、まさこさん。

ところで「今、何時かな？　アカン、もうこんな時間や。また来月」。　（渡邉）

しゃらりんちゃん

さくら餅 編



ちょっといこか

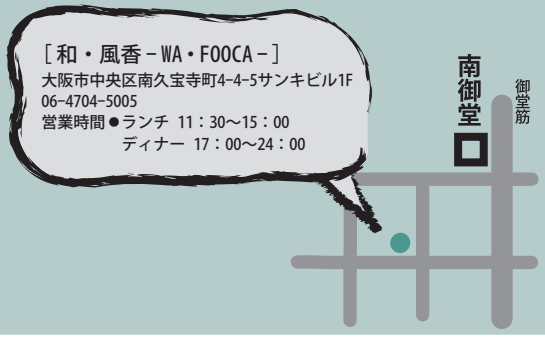
■南御堂周辺のお店紹介

「和・風香—WA・FOOCA—」

目まぐるしく変わりゆく街の風景。スポットライトは一夜にして消え、そしてまた新しいボリュームが絞り上げられる。しゃらりんの"ちょっといこか"調査団はそんな南御堂周辺の人生にも似た街の姿を背に受けて、今夜も新しい店をターゲットにする。南御堂から南へすぐ、さっぱりとした店先は『和・風香』WA・FOOCAと名のっていた。ガラス越しにのぞけば、いかにも以前は違う業種の店内を思わせる。

「変わってゆくなぁ」と小さくつぶやくように店の中へと入って行く。店内の階段を上がり中二階風フロア—に案内される。「生ビール」。合言葉のように口から出てくるのだが、これも調査だからしかたがない。会議で疲れた空腹を満たすため、ほんの少しだけ食べ物をと「蛸黒こしょう揚げ（800円）」「九条ネギと宮崎産地鶏の照焼き（900円）」など、おもむろに注文する。あくせくと変化する街を眺めながら、人間の一生について考える。と、そこへ注文の品を運んできたのは、洋風な店内とは不釣合いの、和服を身にまとった超和風美人。

……。「ええっと、次は何を頼もうかなぁ？」「あっ、おねえさんちょっとエエかなぁ！」「みんな、なんか注文してや」「何、お代わり呑む？」これも調査だからしかたがない。（廣瀬）



編集後記

◆同朋大会のポスター制作を依頼され、合掌している姿の写真を求めました。門徒さんを写したものはありましたが、絵として使えそうなものがありません。◆ならばとインターネットでデザインに使う素材集の中から写真を探しましたが、これが全然見つかりません。「合掌」「念仏」「法事」「いただきます」その他諸々…思いつく限りで検索してもダメ。しょうがなく有名どころの商業用写真会社をひとつひとつ覗いてもダメでした。◆これだけ探しても見つからないということは、そうした写真は市場に需要が無いということです。それはつまり、合掌している姿がメディアに載るような生活のワンシーンではなくなっていることを意味しています。◆世間の感覚のシビアさを感じました。こちらももっとシビアに危機感をもって、日常生活にお念仏を取り戻す努力をしなければならないようです。（H）

発行日：2005年4月1日
発行所：真宗大谷派大阪教務所
大阪市中央区久太郎町4-1-11
06-6251-4720
発行人：比良正士
編集：　第４組　常榮寺・久世見証
第12組　清澤寺・澤田　見
第12組　乗雲寺・渡邉延江
第17組　法観寺・廣瀬　俊
第27組　真善寺・松林俊明
イラスト：第27組　願隨寺・平野圭晋
第９組　看景寺・豊島幸代
第10組　是三寺・北川浩三
http://www.icho.gr.jp/shararin/